新芽（太田義一）△待宵草（江森大〔天〕壽）△幽邃（鶴田機水）△雨あがり（山脇皜〔雲〕雪）△朧月（石島古城）△冬（勝田蕉琴）△柏にインコ（渡邊香涯）△墨畫山水（本多天城）

（『東京美術学校校友会月報』第十二巻第二号）

翌大正三年は十月に開校満二十五年紀念行事があったため展覧会は見合せ、翌四年三月十九日より四月九日まで竹の台陳列館で第三回展が開かれ、一八八点が陳列されて五四〇〇人の入場者があった。買上品については上記月報第十四巻第一号に

宮内省御用品

蕭寺訪道　鈴木　雪哉筆

冬　中村　如等筆

雪の渡場　竹の下舊俊筆

皇后宮職御用品

水墨山水　小島　獨山筆

殘照　吉原　雅風筆

殘雪　岩田　正巳筆

と記されている。

同年末、同会は解散し、東台美術会という新組織が成立した（670頁参照）。

⑫ 小林万吾留学

西洋画科助教授小林万吾は明治四十四年二月三日、文部省より満三ケ年フランス、イタリア、ドイツ留学を命ぜられ、同年四月二十六日出発。六月十六日パリに到着し、画室を借りてそこを本拠に博物館や寺院、諸展覧会を見学し、イギリス、ドイツ、イタリア、スペインを旅行。帰途にロシアへも立ち寄った。大正三年六月三日帰国。『東京美術学校校友会月報』には彼がフロレンスで水谷鉄也その他の知人と会合した記事（第十二巻第三号）や、帰国後彼が『東京朝日新聞』に寄稿した「一頭地を抜く仏国の画界」および『毎日新聞』に寄稿した「欧洲見聞記」の抜粋（第十三巻第三号）の要旨が紹介されており、また、『美術新報』第十三巻第十、十一、十二号に彼は「滞欧中の所感」を寄稿しているので、留学生活の一班を窺い知ることができる。なお、東京芸術大学芸術資料館には彼の留学中の模写であるシャルダン作「カルタの城」、ゴヤ作「灰色の服の婦人像」（いずれも大正四年買入れ）、シャヴァンヌ作「貧しき漁夫」（大正三年生産）が収蔵されている。

⑬ 白馬会解散

本校西洋画科と密接な関係のあった白馬会は、所期の目的を達成したことと個人主義に徹すべき時代になったことを理由に明治四十四年三月八日に解散を決議した。これについて同年三月十日付『国民新聞』は次のような記事を掲げている。

◎洋畫界の異彩

白馬會解散す

黒田清輝氏の談話

去る廿九年の創立以來我國洋畫會に多大の貢獻をなし且常に氣運の先導者として重きをなしたる白馬會は時勢の推移に鑑み此際斷